

第1回：「比較社会学者・鶴見和子と鶴見和子文庫の紹介」

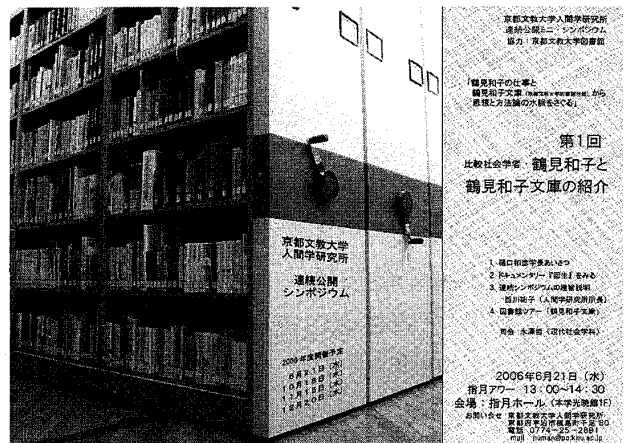
2006年6月21日（水）

あいさつ：樋口和彦

今回、本学のごく近く宇治の里に住み、87才のお年で今なお矍鑠（かうしゃく）とされている鶴見和子先生のご寄贈になる鶴見和子文庫の紹介といういわば宝の箱の口開けをすることになったことを、本学人間学研究所長西川祐子先生からお聞きして大変嬉しく思っています。この機会を皮切りとして、西川祐子先生らしくミニ・シンポジウムと称して、小さく入って大きく育てようとする企てを私は大変意義深く思っています。

この文庫は、先生から詳しいご説明も後ほどあると思いますが、鶴見和子先生が本学創設に当たってご自身が生涯にわたって収集した文献と研究成果、またその成果を生み出すことになった生の研究資料の一切を、宇治への移転に際して、本学の図書館に寄贈されたものです。膨大な生資料のほうは今まで殆ど手つかずに今日まで所蔵されてきました。この大学は創立10年の新しい大学で、創設時は大学建設の目の前の緊急の課題にとりまぎれて、この文庫の内実にまで実は手が届かない状況でした。これまで、鶴見太郎早稲田大学助教授が本学にご在勤中にご助言をくださり、そのご指導の下に図書データベース化の作業をしてまいりました。しかし、大部分の手稿資料等は手付かずのまま今日に至っています。

これは学長としての着任以来、この宝庫をどのように研究に生かすか、何時も私の念頭を離れたことはありませんでした。今もって恥ずかしい話ですが、その文庫の全容とそれがもつわが国への学問的意義については見当もついておりません。したがって、まずこの様な形で、ひとつの試みがなされることは、創立以来日が浅い大学にとって真に有り難いことで、この企てが



将来大きく育つことを願っています。また、これによって本学の学問がどの様に発展するか大きな期待をもって注目しています。

また、本学図書館には比較社会学者としての鶴見和子先生の著作および文献資料ならびに蔵書のみならず、評論家鶴見俊輔先生の父君でもあられる大正昭和の時代、当時の名の知れた政治家であり、経世家の代議士であられた鶴見祐輔氏所蔵のウッドロー・ウイルソン関係の蔵書もご寄贈いただいています。ウッドロー・ウイルソンは米国思想上興味ある人物で、国際連盟創設の時代にアメリカの国際主義と国家主義の挟間で揺れ、今日でも民族問題は新たな視点から、アメリカの国際主義と衝突していますが、このウッドロー・ウイルソン研究は米国本国でも今もって顧みられていませんが、やがて21世紀の国際社会の思想史的研究の上で意義がある人物としてやがて真剣に取り組まれることでしょう。あまり知られていないことですが、これらの文献は本学図書館の特別室に収められています。

鶴見和子先生については、「共生の思想」や南方熊楠の「曼陀羅の思想」から、「内発的發展論」まで多くが様々な学問の分野で注目され

ています。特に、わが国の戦後社会の基本的構造の施策に数多の誤謬があることが今明確になりつつありますが、例えば先生の初期の水俣研究のフィールドノートなどは今日では真に貴重な文献であると理解しています。また、鶴見和子先生の個人的体験からくる「老い」や幼い時の「日本舞踊」の手習いが、どのように体の中に基本的に組み入れられて、その後の人生の深いところで役立つか、これは本学の『人間学研究』第1号に収録されているシンポジウム記録「生命のリズム－倒れて後に思想を語る－『鶴見和子曼荼羅』刊行記念」で和子先生ご自身が語っていらっしゃいますので、是非お読み頂きたいのですが、この様な発言は人間の意識の奥に存在する魂の語りとなつてだされております。先生は様々な身体的な制約にも関わらず益々ご健在であられ、著書にテレビに活躍しておられます。

何時の日かまた先生の本学へのお出ましの時を期待していますが、京都の南、同じ宇治の地にお住まいでいられます。本学の学生である後輩達、文化人類学や臨床心理学の学生のみならず、新たに加わった現代社会学の若き学徒たちが先生の学問の実際に触発されて、彼等のよき未来が豊かに開拓されるように祈っています。

趣旨説明：西川祐子

鶴見和子文庫の特徴と魅力は次の三点にあります。第一に鶴見和子文庫というまでもなく、鶴見和子研究の基礎資料です。鶴見和子さんは、比較社会学の研究者、生活記録運動や水俣の公害調査団に参加する社会運動の実践家、そして戦後思想を代表する思想家の一人でいらっしゃいます。とりわけ、それぞれの個人、それぞれの地域、それぞれの社会が固有の内発的な創造力を持ち、その可能性はキーパーソンをとりまく関係性のなかで展開されることを実証研究をふまえながら説いた「内発的發展論」、その一部をなすと同時に独立した作品である「南方熊楠論」や「柳田國男研究」、「パーソナルヒストリー研究」など、たくさんのお仕事をなさっています。そのほかに、日本舞踊、和歌、着物による自己表現がすばらしい。いわば多面

体の輝きをもつ個性の書齋にあった蔵書、約5000冊が本学図書館の開架式本棚にならべられ、今まで大勢の利用者がありました。

図書館の鶴見和子文庫のちょうど隣のあたりに全集本の本棚が配置されています。そこにはもちろん鶴見和子さんの著作集である『鶴見和子曼荼羅』（藤原書店）も並んでいます。その一巻、一巻に収められている鶴見和子さんの著作はどのようにして書かれたのか。すぐ右側の鶴見和子文庫を探せば、鶴見和子さんがご自分の研究をすすめるときに使用された資料文献、ご自分の学説を組み立てるにあたり、書齋においてページに色鉛筆で傍線を引きながら真夜中の孤独な論争を試みた相手、つまり研究の参考文献を見つけることができるのです。仕事の舞台裏をこのように惜しみなく閲覧に供する研究者はこれからもなかなか出ないと思われます。研究の舞台裏拝見は、探偵の冒険と推理のスリルに富み、何よりも知的作業とはどのようなものかを教わる良い機会です。

第二に、鶴見和子文庫には、研究の本だけでなく、漫画や、綴り方運動をはじめ生活記録運動の文献、また環境問題についての一般書が数多くふくまれています。実はこのシンポジウム企画のほかに、また連続シンポジウムを準備する意味からも、人間学研究所では水曜日と木曜日の昼時間に所長室を開放し、ランチタイム・ワークショップ「鶴見和子文庫を読んで（読まなくても）語る会」をはじめました。院生、学生、教職員が弁当を食べながらおしゃべりをする集まりなのですが、鶴見和子文庫で踊りの本、着物の本をみつける人もいれば、水木しげるの漫画が多いと発見する人、あるいはエジプトのピラミッドの本があった不思議を語る人、自分史や生活記録など普通の人々が普通のことばで時代の証人として語る本をみつける人などがいます。

これらの本からも、鶴見和子さんが象牙の塔にこもりきりの研究者ではなかったことがよくわかります。ご自分の研究が学会に貢献するだけでなく、普通の人々の普通の生活とどうかかわるのか、は鶴見和子さんが考えつづけてきた問題であったと思われます。鶴見和子さんは研究

対象を遠くから観察をするのではなく、「自分を
含む集団」の研究でなければならないと言われ
たことがあります。

現在、どの大学でも地域のなかにおける大学
の役割を問い直し、地域との連帯を考えはじめ
ています。私たちの研究所のこれまでの共同研
究や大学全体の取り組みは、早くから地域との
関わりをテーマにしてささやかな実践を重ねて
きました。しかし、これは口で言うほどたやす
くはありません。鶴見和子さんがお元気な頃に
果敢にこころみられたお仕事、ご病気から回復
されたとはいえ不自由な境遇にありながら続け
ていらっしゃる発言から、わたしたちが学ぶと
ころは大きいと思います。

第三に、これがもっとも重要なのですが、鶴
見和子文庫は、現代史のトピックスとなった出
来事にかんする本を数多くふくんでいます。集
められた多種多様な書籍は、鶴見和子さんの知
的好奇心の広さと深さ、そして行動力のおよぶ
範囲をあらわしています。鶴見和子さんが英語
で書かれた博士論文の題は、『社会変動と個
人』でした。ご自身、アメリカ留学中に太平洋
戦争が勃発、敵国となったアメリカから日本に
帰国するという社会変動を体験しておられます
。それ以後、敗戦、焼け跡の廃墟からの復興、
経済高度成長、その破綻、そしてふたたび
経済戦争の廃墟を体験する。戦後史の主な出来
事があるたび、自ら進んで変動の渦にとびこ
み、時流に竿をさして警告をはっし、同時に廃
墟のなかから希望の方向をさししめしてしま
した。鶴見和子文庫にはしたがって、新設大学
に不足しがちな1950年、60年、70年、80年代に
出版され、当時の話題となった本たちが含ま
れています。これは現代史の貴重な資料です。
じっさいに本棚に並ぶ本たちを手にとってとり
だし読むことによって、戦後を代表する比較
社会学者、社会運動の実践家にして哲学者
である鶴見和子を突き動かした時代の動きを
私たちも実感をもって受け止めることができ
るのではないかと。戦後思想をいかに引き継
ぐか、がこの連続シンポの大きな課題とな
ります。

さて、秋からの残り3回のシンポジウムは、
全体テーマ「鶴見和子の仕事と鶴見和子文庫から

思想と方法論の水脈をさぐる」のもとに毎回
が読みきりであると同時に続きがある長期連
載のような形で進めてゆきます。毎回、鶴見
和子さんのテーマをその歴史的文脈の中に位
置づけると同時に、あらためて現代の文脈の
中において継承することとを心がけたいと思
っています。戦後思想から何をうけ継ぐか、
はさらに、次年度にまでおよぶテーマとな
るでしょう。

この後、NHK番組録画『回生』（1998年放
送、プロデューサー：坂元良江）を見ます。
これは、脳梗塞にみまわれた鶴見和子さんの
リハビリテーションのご様子と知的営みの奇
跡的な復活を描いています。この中に鶴見和
子さんが、「研究者は頭脳労働をするだけで
なく、真夜中に原稿を書きながら一行の記述
を確かめるために、高い本段の上段にはしご
をかけてよじ登り、参考文献を参照する身体
労働をするのです」という意味のことを言われ
、つづけて「病気でそれができなくなったか
ら自分の書齋にあった本を新設の京都文教大
学の図書館に寄付してみんなに利用してもら
います」とおっしゃっております。映像には
書齋の本も、ちらっと映っています。その本
たちが、シンポジウムの後にみなさんをご
案内する本校図書館鶴見和子文庫になるわけ
です。したがって、ドキュメンタリー『回生』
は、本たちの旅の物語として鑑賞することが
できます。

スピーチ：

「連続公開ミニ・シンポジウム開催によ
せて
一鶴見和子先生の思い出」

中谷文美

今回の連続公開ミニ・シンポジウムの企
画については、以前から西川先生より話を伺
っていたのでぜひ参加したいと思っていまし
たが、時間の都合もあり断念していました。
しかし企画が段々と形になり、西川さんから
その都度ご連絡をいただくうちに、しだいに
居ても立ってもいられなくなり、「ああ最初
のシンポジウムで皆様がこの『回生』のビデ
オをご覧になるときに私も立ち会いたい」と
いう気持ちが非常に強くなったので、本日
駆けつけた次第です。

この企画は「鶴見和子さんの仕事」をテ
ーマ

とし、その素材となるのがは京都文教大学に寄贈された鶴見先生の蔵書であると理解しております。しかし西川さんが説明されたように、「対象と関わる」ということ、やや俗な言い方をすれば「血の通った学問」というものを目指し、実践してこられた方の仕事に向き合うにあたっては、まず何らかのかたちでその人となりに接することが価値をもつと思われれます。その意味において『回生』のビデオを鑑賞することは、この連続シンポジウムのスタートにあたってやはり相応しかったのではないかと思います。

私自身の鶴見先生との関わりについてですが、私は学部時代の三回生のときにゼミで一年間、鶴見先生にお世話になりました。それに先立って先生の講義を二つ受講していました。それだけといえばそれだけの関係なのですが、その後もOBやOGの集まりなどには何度か参加しています。実は1995年にお倒れになった前の日にも先生を囲む集まりがあり、そこに私もたまたま居合わせていました。

しかしそういったものとは別に、ゼミ時代の鶴見先生は、非常に強烈なインパクトを私に与えてくださいました。この『回生』の番組からもうかがえる、あくまでも常に前向きの姿勢、そして非常に貪欲な知的好奇心。言葉にすると平凡ですが、この番組からも伝わってくる気迫のようなものを、私は学部時代に直に拝見することができたわけです。

ゼミという場でもおそらく鶴見先生は、「教師が学生に教える」というスタンスはとっていらっしゃらなかった。むしろ結果として私たちは多くを学びましたが、鶴見先生は常に、この学生たちが繰り出してくる何ともいえない様々なテーマに対して、ここから自分は何を吸収できるだろうか？ 何を学べるだろうか？ ということを考えておられるようにも見えたのです。そうして容赦ないディスカッションをいつも仕掛けてこられた。前期のゼミではイヴァン・イリイチの『シャドウ・ワーク』や、ちょうど出版されたばかりの『水俣の啓示』といった本を講読したわけですが、後期になって学生たちが出してくる発表テーマというものは、私

のものも含めて本当に多種多様でした。しかし鶴見先生は一つひとつのテーマに対して真剣に向き合って、「これをどうやったら論文に仕上げる事が出来るか、皆さん考えてください」と毎回おっしゃっていました。

実を言うところの『回生』の番組でインタビューを行っているのは、その時のゼミの同級生です。そのせいか、カメラに向かってしゃべるときの鶴見さんの顔は「先生」になっているなど感じます。私もあらためて観ていると、一気に20年戻って学生になってしまうような、そういう意味での連続性があります。

鶴見先生ご自身は「回生」という言葉で「倒れて後」の自分というものを語っておられるため、それ以前との連続性を誰かが指摘するということは、必ずしも先生の意には沿わないかもしれません。ただこの番組で描かれている鶴見和子さんは、倒れられる前からもずっとこういう鶴見和子さんだった、ということは証言をさせていただいてもいいかなと思っています。

鶴見先生の著作集が『鶴見和子曼陀羅』と名付けられたことは、まさに言い得て妙と思われるます。鶴見先生はたくさんの切り口、たくさんのテーマ、たくさんの引き出しを持っておられる方であり、私自身はその一端に触れたに過ぎない、ということもわかっているつもりです。そして、もうひとつのオルタナティブな発展のあり方や内発的発展の思想であるとか、当時の私たちの目の前に鶴見先生が差し出してくださっていた魅力的なテーマの背景には、緻密に積み上げられた社会学の理論というものがあるわけですが、ご本人は「そこがつまらないから先に行ってるのよ」というふうにおっしゃっていた。でもそれを言われる学問的な背景を消すことはできない、そこに確実にあるものだということふうには当時から感じていました。おそらくそれは、この大学に収められている鶴見先生の集められた、そしてその思考を鍛えてこられた過程に立ち会っている書物、そのたくさんの蔵書の中にヒントがあるのでは、と想像しています。

私自身の学問的関心ということについては、これまで鶴見先生が取り上げてこられたテーマ

と直接切り結ぶことは少なかったのですが、しかし「もっとほかの引き出しをあけてみたい」という思いがあり、今回の連続シンポジウムを通じて私には見えていなかった他のお仕事の側面や、その背景にあるものをたどる道筋というものに伴走させていただければ、と考えています。

鶴見和子という人は社会学者であり実践家で

あり思想家であると西川さんはおっしゃいましたが、そういう人物の思想のかたちというものを私たちがどう受けとめて消化し、どうやって引き継いでいくことができるのか。その可能性を手探りで拓いていくということを、これからこの連続シンポジウムの中でされていくのであらうと思われます。皆様もぜひ一緒にお立会いただけたらと願っております。